坂口安吾「ラムネ氏のこと」における名詞
――幸田露伴「文明の庫（くら）」「頼朝」、森鷗外「サフラン」との対比から――

吉田 大輔

はじめに

本論では、坂口安吾（一九〇六―一九五五）の随筆「ラムネ氏のこと」（『都新聞』一九四一年十一月二〇日に「上」、二一日に「中」、二二日に「下」の三回にわたって掲載）を取り上げ、そこに述べられる名詞への態度を考察する(1)。議論に際しては、安吾への作家論的考察を行うことや、同時代状況に接続あるいは還元させた解釈を行うことよりも、先行する他作家の文章との対比から、その特徴を考察することに力点を置く。では、「ラムネ氏のこと」の特徴は、誰の、どのような文章との対比から測ることが可能だろうか。

本論では、「ラムネ氏のこと」の内容に強い近似が見られ、かつ、これに先行する文章として、幸田露伴（一八六七―一九四七）「文明の庫」（一八九八）ならびに「頼朝」（一九〇八）を重視したい。内容に強い近似が見られるということは、裏を返せば、両者の差異も併読から浮き彫りになるということでもある。直接の影響を立証することは難しいものの、先行するこれらを補助線として用いるとき、「ラムネ氏のこと」の歴史的な意義は、より鮮明になるだろう。また、同様の理由によって、森鷗外（一八六二―一九二二）の随筆「サフラン」（一九一四）との対比も試みたい。以上の論点を中心として、「ラムネ氏のこと」は安吾独特の名詞論として成立している、と位置づけることを本論の目的とする。

一、「ラムネ氏のこと」をめぐる評価史

前述のように、「ラムネ氏のこと」は、『都新聞』に一九四一年十一月に三回にわけて発表された。発表から約十五年後、一九五五年、花田清輝・佐々木基一・杉浦明平編『日本抵抗文学選』（三一書房）に収録され、ふたたびこの小品に光があてられた。ついで、一九六六年、『現代日本文学館』二七巻に梶井基次郎、中島敦とともに安吾があてられることになった際、「文学のふるさと」「ラムネ氏のこと」の二編のエッセイを、安吾の友人だった文芸評論家・大井廣介が、小説のほかに、特に選んで収録させた。大井は、「その発想と飛躍はちょっと類がない」と述べ、これに高い評価を与えている(2)。大井が言うように、「ラムネ氏のこと」は、安吾の文章の魅力をよく伝える小品であり、現在までに先行研究は比較的多い。一九七〇年代から筑摩書房の高校国語教科書に採用されていることもあって、教材としてこれを分析したものも多く見られる。現在までの研究史を大まかにまとめれば、戦時下における安吾の抵抗の文章として「ラムネ氏のこと」を捉え、明言しにくい抵抗がいかに書かれているかという観点からの議論が初期研究では多かったが、より多様な解釈が模索されている段階にあると言えるだろう。

近年の研究としては、浅子逸男、丸川浩、原卓史、宮澤隆義らの論考が挙げられるが、「ラムネ氏のこと」を漱石との連続において捉えようとした部分がある浅子の議論や、これを文明評論として解釈した丸川の議論に、本論はやや近い発想にある。浅子は、漱石『吾輩は猫である』に、海鼠をはじめて食べた人への言及があることを挙げ、「何かあることを最初に行った人へのまなざしは、安吾にも通底するように思われる」とする(3)。丸川は、安吾の「文明批評家的な視点」の「習熟度」を示すものとして「ラムネ氏のこと」を重視し、その美点を「一般的には価値のないものごとに血道をあげて、歴史の中にその痕跡を残すこともない無名の人々と、自己の生き方を結びつけている点」に見出す(4)。こうした議論の発展的継承として、本論は、露伴「文明の庫」「頼朝」、鷗外「サフラン」を、安吾「ラムネ氏のこと」の主題に先行した文章として仮に設定し、その対比から安吾「ラムネ氏のこと」を考察する。

二、「ラムネ」から「ラムネー氏」へ、「ラムネー氏」から「ラムネ氏」へ

「ラムネ氏のこと　上」で、まず安吾は、「小林秀雄」「島木健作」、そしてすぐ後には「三好達治」という人名、加えてその間に「小田原」という地名を挟みながら、文学者たちが集う様子を語る。そして、その席で、「談たまたま」「ラムネ」のことに小林秀雄が話を及ばせ、「ラムネの玉がチョロチョロと吹きあげられて蓋になるのを発明した奴が、あれ一つ発明しただけで往生を遂げてしまつたとすれば、をかしな奴だ」と言った、ということになっている。そして小林の言葉を受け、三好は、「ラムネの玉を発明した人の名前は分つているぜ」と応じたらしい。三好は、「ラムネはラムネー氏なる人物が発明に及んだか

らラムネと言ふ」と、おもしろいことを主張しはじめる。

「ラムネ」という普通名詞の音韻から、ふいに発明者「ラムネー氏」が想起されていく。読者は、ここで提出される「ラムネ」という材の面白さや軽妙な語り口に導かれて、三好達治の発言をつい笑ってしまうし、このおかしみは、大きな魅力である。

だが、あのような形状の壜にあのように炭酸水を詰める手法を確立させた歴史上の誰か、いわば「本当のラムネー氏」の名前は、三好の話を聞いている坂口安吾、小林秀雄、島木健作の三人にも、「ラムネ氏のこと」を読む者の多くにとっても、おそらく知識の前提ではない。「ラムネ」という名詞が「ラムネー氏」に由来するかもしれない、ということの当否は不確かなまま、文章は進んでいく。そのようなことはあるわけがないと笑いつつも、一応、ありあわせの辞書をその場でひく。だが「ラムネー氏は現れない」。しかし、いまここにある辞書に記述されていないからと言って、ラムネという名詞は「ラムネー氏」に由来するものではない、と言い切れもしない。この辞書が悪い、「プチ・ラルッス」にはちゃんと載っている、と三好は言うからだ。だからこそ、安吾もその場では話がうますぎると笑いながら、帰宅後、一応、自宅にあった「プチ・ラルッス」をひく。「ラムネ氏のこと」本文では明言されていないが「ラルッス」というこの辞書の名前もまた、編纂者・ピエール・ラルースに由来するのは、含みある小道具にも思われる。安吾は、もしかしたら本当かもしれないので、一応、帰宅後に別の辞書でもういちど確かめる。このように、ことの当否が不確定であるという揺らぎによって、「ラムネー氏」という存在は、文章の上にだんだんと仮構されていく。

「プチ・ラルッス」をひいた際、音韻の類似によって、「フェリシテ・ド・ラムネー」という一つの固有名詞に安吾は出会う。しかし、この「ラムネー」（フェリシテ・ド・ラムネー）が、三好の言う、あの「ラムネー氏」（ラムネ壜の開発者）であるかは、やはりわからない。だから安吾は、「その絢爛にして強壮な思索をラムネの玉にもこめたとすれば」とあくまで仮定によって文章を続ける。そこからふいに、「ラムネの玉は益々もつて愛嬌のある品物と言はねばならない」と断定的に飛躍する。

このように、「ラムネ」という事物とその固有名詞から「ラムネー氏」への想起を可能にする原理は、当たり前のようだが、発明者とされる人物の名が冠された事物がそもそも少なくない、ということだ。たとえば、カーディガン、ブラウン管、ペトリ皿、ギロチンなどを思い浮かべてみよう。だが、これらの名詞が人物名に由来する（もしくはそのような説がある）ことは、誰かに直接的・間接的に教えられるという経験によってはじめて知り得る事実だ。多くの人は、身の回りの何でもないようなものの名詞の由来をさして知らないで生きており、また知っていても、トリヴィアルな知識と考える。

では、「本当のラムネー氏」は誰なのだろうか？「本当のラムネー氏」の名前は、一般には、一八七二年にアメリカでこの壜の特許を取得したハイラム・コッドというイギリス人であるとされる。興味深いことは、英語圏では、ラムネ壜は、彼の名を冠してCodd-neck Bottleと呼称され、Coddという発明者の名を冠して普通名詞化している、ということだ。仮に日本で、ラムネ壜が「ラムネ壜」と呼ばれることなく、英語からの直訳風に「コッド壜」と呼ばれていたならば、そもそも「ラムネ氏のこと」の導入が持つような、揺らぎもおかしみもなくなる。「ラムネ氏のこと」は、「コッド壜はコッド氏なる人物が発明に及んだからコッド壜と言ふ」というような話ではない。むしろ、発明者が誰なのか名指すことはできない、しかしそういう人間が必ずいたはずだ、という想起にこそ、「ラムネ氏のこと」という文章の豊かさは存在する。

このように仮構された「ラムネー氏」という表記は、先行研究に指摘があるが、「ラムネ氏のこと　上」にのみ登場し、「中」「下」には登場しない。「中」「下」に登場する表記は、「ラムネー氏」ではなく、「ラムネ氏」なのであり、ラムネの発明者として推測される人間ひとりを「ラムネー氏」と呼び、事物などのあり方を変えた集合的存在としての人間を「ラムネ氏」と呼ぶ、というように安吾は表記を使い分けている。つまり、普通名詞（ラムネ）から、語源としてのひとりの発明者の名（ラムネー氏）が想起されたのち、そのような精神を持つ人間の姿をふたたび集合的に名指すために「ラムネ氏」という言葉が用いられる。

「ラムネ氏のこと」冒頭に語られる内容と同一日時の出来事が、安吾の別の文章「釣り師の心境」に見られることはすでに多く指摘されてきた。「ラムネ氏のこと」に見られる酒宴の様子は、「釣り師の心境」でも描写されるが、こちらの文章では、ラムネという名詞とその起源をめぐる挿話は出てこない。ただ、「ラムネ氏のこと」と同様に、三好達治がその場で乱れた様子が、異なった色彩で描かれる。「釣り師の心境」の記述に従えば、その夜、三好と小林秀雄とが

「萩原朔太郎について」「大戦乱」を起こし、三好はぼろぼろ泣き出してしまったのだという(5)。先行研究では特に問題にされていないが、三好と小林とが起した「大戦乱」の話題が「萩原朔太郎について」のものであったということは、すこし注意を払ってよいことに思われる。「ラムネ氏のこと」「釣り師の心境」で描かれる同じ夜、「ラムネ」「萩原朔太郎」双方に一同の話が事実及んでいたのだとすれば、萩原朔太郎が一九二五年に書いた「ラムネ」という文章が、彼ら四人の間で話題になっていたのかもしれない。

「ラムネ」という文章で、朔太郎は、ラムネを「不思議になつかしく愉快なものだ」と言い、郷愁をこめて語る。そして、「この頃では、もうラムネが古風なものになり、俳句の風流な季題にさへもなつてしまつた」とも言う(6)。そう知られたものではない、この朔太郎の文章が、その場で四人の話題になっていた証拠はなにもない。だが、重要なのは、ラムネに郷愁を抱くような、いまの我々に通じるような感受性が、朔太郎がこれを書いた一九二五年の段階ですでに存在していたことが、これを読むと確認できることである。「ラムネ」が季語化するのも、事実、この頃のことだろう(7)。朔太郎の文章を併せて読むと、安吾がラムネを語るとき、朔太郎のような意味での郷愁をまったく述べていないことが理解される。

三、固有名を確定させようとする露伴、無名性に「一篇の大ドラマ」を見る安吾

「ラムネの玉」の話を受けて、より普遍性のある話へ、安吾は文章を展開させはじめる。「我々の周囲にあるもの」は、「大概天然自然のまま」にあるものではなく、「今ある如く置いた人」「発明した人」がいたのだ、と安吾は言う。だが、それはひとりの「発明者」(ラムネー氏)という「点」によってなされたものだろうか。それだけではない、それは「線」として捉えることもできる。

安吾は、「フグ料理」という新しい例を出す。特に歴史的な来歴に負うものと考えることもなく、我々はそれに酔い痴れている。だが猛毒を持つ河豚をこのように食べられるのは、「料理として通用するまでの暗黒時代」に、それを食べられるようにしようとした人たちの「一篇の大ドラマ」があったからである。そのように考えれば、河豚料理は、「幾十百の斯道の殉教者が血に血をついだ作品」であると言える。そして、そうした人たちの名前は残ることがない。その人たちの名前は、「筑紫の浦の太郎兵衛」かもしれず、また「玄海灘の頓兵衛」かもしれない。そして、河豚を食べて死んでいく人のなかには、子孫に河豚を食べることを禁止する遺言を残して死んだ「太郎兵衛」がある一方で、血をしぼるのを忘れて食べたのがいけなかった、血をしぼって食べるように、と具体的な助言を残して死んだ「幾百十の頓兵衛」が必ずいたはずだ、と安吾は言う。「ラムネ」の発明者としてまず仮構された「ラムネー氏」が「点」的な革新者であるのに対して、「フグ料理」を料理として成立させた「太郎兵衛」や「頓兵衛」は、河豚を食べるための情報を命を賭けて伝達・継承していった「線」的な革新者である。また、ラムネの発明者ならば、「ラムネ」という普通名詞から出発して、「ラムネ」は「ラムネー氏」が考案したから「ラムネ」と呼ぶのだろうか、というように名詞の由来を考えることでひとりの発明者を想起することはできる。だが、「フグ料理」という言葉そのものから、ある「点」的な発明者を想起することは難しい。しかし、フグ料理は現に存在し、この猛毒を持つ魚を食べることが可能になっている。フグ料理を可能にした、無名かつ線的な人間たちの姿を想起させるように、「太郎兵衛」「頓兵衛」と仮名を与えながら安吾は書く。

こうした部分について、これまでの先行研究では、先行する他作家の文章との類似と差異という観点から、さほど考察されてこなかった(先述のように、浅子や丸川の議論は、先駆的にこの点を問題にしている)。

筆者の考えでは、直接の影響関係は言えないものの、安吾「ラムネ氏のこと」のこうした部分に、もっとも近接を見せる文章のひとつは、露伴「文明の庫」(一八九八)である(8)。『少年園』『少國民』『実業少年』などの雑誌に依って、一八八九年から一九一二年にかけて露伴は、啓蒙的な少年文学を多く書き、こうした露伴の少年文学には、発明譚の系譜に連なるものが複数ある。その中でも「文明の庫」は力作と呼びうるものだ。平川祐弘が言うように、露伴のそうした啓蒙的発明譚の意義は、まず福澤諭吉の文明論や、中村正直の文明論の発展的継承という側面がある(9)。露伴の発想は、福澤の「文明」の捉え方と親近性を持つが、福澤の『文明論之概略』においては、身の周りの事物を創造した人間よりも、社会制度その他を創造することが上位に置かれる。その一方、中村正直訳サミュエル・スマイルズ『西国立志篇』(一八七一)では、なんらかの事物の発明者に言及が見られる。だが、その捉え方は、ひとりの発明者の苦労を語

るというように、やや「点」的な捉え方をしている(10)。これらの継承として書かれた露伴「文明の庫」は、身の周りの事物の起源のみならず、事物を発展させ続けた膨大な固有名を挙げ、事物の歴史を「線的」なものとして描き出そうとする試みであった。露伴は、この文章を陶器、紙、銃器、仮名、の四章に分け、それらを考えだし、改良し、現在に至るまで人間の生活に恩恵を残す、多くの人名を書き残そうとする。露伴は、「文明の庫」の「緒言」において、「如何なる幽微なるもの」も、「所以無くして忽然と」この世に現れたものではない、と言う(11)。

「ここに茶碗あり」と、文章の上で「いま・ここ」を仮構しながら、それらを創り出した人間に読者の注意を喚起する。「造り出さんと思ひたる人」（発案者）「造り出さんと働きたる人」（実行者）とを弁別しつつ、「それらの人々の心によりて手によりて」生み出されたものに我々は取り巻かれているのだという。そして、その茶椀の底を見ると「五助」という名が記されており、小刀には「清長」という名前が彫られていることを述べる。露伴は、茶碗に「五助」と署名があり、小刀に「清長」と署名があるのとおなじように、「筆」「墨」「硯」もまた「自然に世に現れ出で來れる」ものではないのだ、と展開していく。だが、「硯」には製作者の署名がない。だからと言って、もちろん、それを製作した人がいないわけではない。事物に加えられた「手工」の「痕いちじるしき」を「見れば、それもまた誰かの手がつくりだしたものなのは明らかだ、という。署名のない事物の背後にも、それを製作した人間の姿があることを想起させようとする。そのうえで、「針の如く細く小なるもの」も、「貝の釦鈕の如く輕く微なるもの」も「所以無くして」世の中に出てきたわけではないとして、どんなに些細なものに見える人工物もそれが人工物である限り、必ずそれをつくった人間があるのだ、と書く(12)。

ついで、人工物の背後にある人間の姿を露伴はさらに四つに弁別する。「造らんとする人」「造る人」だけがそこにいるのではなく、「造りはじめんとしたる人」（造りはじめようとした人、意志を抱いた人）と「造りはじめたる人」（造りはじめた人、意志を実行しはじめた人）がいるからこそ、ものが「世に現れ出づる」のだと露伴は言い、事物の創造をめぐる線的な継承へ注意を喚起する。そして、形ある事物だけが「文明」なのではなく、「郵便の制度」のようなものもまた、目には見えないものだが、これにも必ずそれを考え出した人がいるのだ、と言う(13)。

さらに露伴は、「自らが「ここに茶碗あり」と述べ、文章の上で「いま・ここ」を仮構しながら、身の周りのさまざまなものの起源や来歴について語り出したように、今度は読者の側に「前後右左」の「自己が身を幸福にするもの」を「見よ」と要請する。身の周りにあるものは、「彩絲をもて縢られたる毬子」のようなものであり、それをかがる糸は「恩恵の絲」なのであって、「多く人々の頭より出で手より出で」たものなのだとする。単にそれは人びとの「頭」から出ただけではない、「手に」よっても為されたものだ、と強調している(14)。

露伴は、そうした事物はすべて贈り物なのだ、と述べる。「美しき珠」「香ゆかしき花」を贈ってくれた人がいたとして、それを贈ってくれた人がどのような人で、いかにしてそうしたものを贈ってくれたのかが知りたくなるはずだ、と言う。ここで露伴は、「さるに若し其人の名前を問はんとせで」、つまり、その人の名前を知ろうとしないで、ただ受け取るばかりの人は愚かな人である、とも言っている。「文明の庫」で展開されようとする主題は、ここに、露伴自身によって明確に要約されている。「文明の庫」は、このように身の周りのありふれた事物を発明し、改良し、いまの私達へ贈ってくれた人々の「名前」を明確に記録し、そして「線」的に描き出そうとする一貫した態度のもとに書かれる(15)。

たとえば陶器をめぐって、「五助」と署名があるこの茶碗は、単に「五助」という人によって作り出された事物であるだけではなく、「加藤四郎左衛門藤原景正」や「加藤民吉」らの「功によりて」はじめてここに存在する事物なのだ、と露伴は言う。茶碗は「誰か」の創意工夫によって存在するのではなく、一義的には「五助」、その背後には「加藤四郎左衛門」や「加藤民吉」といった固有名を持つ多くの人間たちの「頭」と「手」があってはじめて存在する事物だと露伴は論じる(16)。

露伴「文明の庫」において、「文明史」と対立する歴史は、「戦史」である。「戦史の上の人々」を露伴は完全に否定しているわけではないものの、「文明史の上」に現れる人々は、戦史の上に現れる人々に比べて、「ひとしほ好ましき人々」であると露伴は書く。戦史の上の人々は、いまの我々になにを残しているだろうか、ただ人の眼を惹く「墳墓」を残しただけだ、一方で、「文明史の上」の人々は、はなばなしく名が残ることこそないが、死んだ後も、恩恵を私達に与え続ける人々だ、と露伴は言う(17)。

「文明の庫」について小野二郎は、「人と物との出会い」から生じる「いかな

る些細なドラマ」をも見落とさない露伴の「覚悟」を読み、また、「物の持つ機能役割というものと、それを生み出した人々の心、人々の手の搏つ脈動との精妙な関係を追体験する想像力」をも読む。だがそれは、「此の世の片隅の人しれぬ生の営みのかくされた尊さ」として記述されているのでもないと言う。そうではなく、陶器の歴史を書く、紙の歴史を書く、それ自体が、「歴史の大道」を歩むことであるという確信が「晴朗につらぬかれ」た文章なのだとする。さらにそれは、「民衆の創造的叡智にたいするロマンチックな讃仰」でもなく、「物質の深層心理」を探ろうとする「不逞な精神」によって書かれているとも言う(18)。

このように安吾と露伴を併読してみると、以下のようなことに気づく。安吾「ラムネ氏のこと　上」の文章に語られていることと、露伴が「文明の庫」で書いた内容は、まず、身の回りの事物を発明した人物、誰かひとりのみを点として注視しているのではない、という視点がよく似ている。「フグ料理」(安吾)にせよ「陶器」(露伴)にせよ、今日の形になるまでに、多くの人間が過去を継承し、発展的に試行錯誤を繰り返した結果、はじめてここに存在する歴史的なものとして、それらは言及される。だが、露伴がそのように発想するとき、そうした線的な事物の歴史に登場する人名を、可能な限り、調べ、文章に留めておこうとする。他方で、安吾は、河豚を食べられるようにした人間たちへ強く注意を喚起し、「大ドラマ」を想起しながらも、彼らにけして固有名詞を与えはしない(もちろん、たとえば露伴が言及する陶器の歴史の上での固有名は、河豚を食べて死んだ人の固有名よりはるかに探しやすい、ということはあるだろう)。

安吾はのちに、「ラムネ氏のこと」が執筆されて約十四年後の一九五五年、『安吾新日本風土記』において、訪れた宮崎県日向を語るなかで、そこの名産の碁石をはじめて作りだした人間の「独創」は「バカバカしくなつかしい」ものだと述べている(19)(この場合の「バカバカし」い、は、けして否定のニュアンスではなく、また「なつかしい」も、おそらく先述の朔太郎的な意味での「なつかしい」とも意を異にするだろう)。そして、「ラムネのタマを発明した人」や、「コンニャクをはじめて作ったり食ったりした人」のことを、そのように碁石を作りだしたひとの「独創」と並置して語っている。ここで、「コンニャク」についての言及があることも、露伴の視点と重なるものである。露伴もまた、「文明の庫」において、「猶一つ小くも見ゆることに就きて例を挙ぐべし」として「蒟蒻」に言及している(20)。安吾、露伴、双方の結論は、極めてよく似ている。双方ともに、蒟蒻という事物は注目されていないが、こうしたものを考え出したり、創意工夫によってこれをひろめたりした人間の功績は末長く残るものだろうという。ただし、途中の論理は、やはり大きく違う。安吾は、コンニャクの発明者をめぐって、「こういう独創的な大人物の名前などはいかなる本にもとどまるはずがない」と述べ、歴史に「名が残らない」ことを強調する。他方で、露伴は、発明者ではないものの、「中嶋藤右衛門」という固有名を明確に挙げ、彼が考えた蒟蒻粉の輸送方法が現在にもたらした利益の額まで具体的に挙げたうえで、賞賛する。

四、レトリックの近接、露伴「頼朝」と安吾「ラムネ氏のこと」

安吾のさきのフグ料理をめぐる箇所は、露伴の史伝「頼朝」の一節との関連からも考察すべきもののように思われる。露伴「頼朝」に関しては、安吾がこれを読んでいた蓋然性は高い。『坂口安吾蔵書目録』(新津市文化振興財団、一九九九)を確認すれば、幸田露伴の著作は、一点、『史傳小説集　一』が含まれている(21)。幸田露伴『史傳小説集　一』は、中央公論から一九四二年三月に刊行されたものであり、先述のように安吾「ラムネ氏のこと」は前年、一九四一年十一月の文章である。奥付をそのままに受け取るなら、「ラムネ氏のこと」を書いた時点では、この本を安吾は架蔵していたわけではないだろう。この本に収められている露伴史伝は、「頼朝」ほか二つである(史伝ではない「文明の庫」は収録されていない)。だが、安吾の蔵書は、小田原時代の洪水被害(一九四一年七月)などで失われたものも数多くあり、加えて、露伴「頼朝」の初出は一九〇八年・東亜堂書房であり、一九二六年には改造社版『頼朝・爲朝』に収められ、一九三二年には春陽堂文庫版『頼朝・平将門』にも収録、さらに一九三四年には改造文庫の『頼朝・爲朝』にも収められ流布した作品であることは注意してよく、「ラムネ氏のこと」を書いた時点で、すでに安吾はこれを読んでいたかもしれない。上田貴美は、詳細な検証によって、安吾ののちの歴史小説「源頼朝」(一九五二)と露伴「頼朝」との間に、多くの類似が見られることを指摘している。また、先行する露伴「頼朝」と、いかに違う頼朝像を出そうとしているかについても詳しく考察している(22)。少なくとも、一九五二年の「頼朝」の執筆に際して、先行する露伴「頼朝」を安吾が意識していたのは、ほぼ間違いない。時系列として、「ラムネ氏のこと」への影響は、明確な前後関係が確認できるわけではないが、本項では、この点を考えてみよう。一九四〇年一月からの安吾の小田原

生活中、ごく近い距離に生活し、本をよく安吾に薦めたという三好達治は、露伴の「頼朝」をはじめとする史伝について、「格別の風格でくつたくがなくて面白い」とものちに述べていた(23)。

露伴「頼朝」は、頼朝を擁護する（当時において）やや珍しい立場から書かれたものである。ある場面へ注目してみよう。平治の乱（一一五九）において源氏側が落ち延びる際、十三歳の頼朝は、疲れから馬上で眠り、一行とはぐれ、守山宿の近くにおいて、源内兵衛という人物に落人狩りの標的にされるが、これを返り討ちにする。露伴は、「頼朝」において、これは「些細な事」ではあるが、「頼朝の英気の発露」だろうと言い、しかしそこには、偶然の要素も多分に作用しているとする。その上で、露伴は、次のように言う。

「頼朝」が「頼朝」として歴史に名を残したのは、かように偶然なのであり、源内兵衛がもうすこし強ければ、頼朝は「反対に細首をチョン切られて仕舞」う。そのようにして、「天下を取るどころか名も殘らず、姓も知られずに終わつて居る頼朝」がこれまでに何人いただろう、と露伴は歴史の偶発性に言及する。あるいは、馬上から引きずり下ろす武器（袖がらみ）が存在した時代ならば、その物理的な理由によって落馬させられ、「崖傍の甚次郎兵衛や新田の平五左衛門」に頼朝はやられてしまっただろう、と露伴は言う(24)。

これは、創意工夫をめぐる話とは異なり、また先に検討した「文明の庫」ではやや否定的に言及されていた「戦史」のなかの話ではあるものの、「ラムネ氏のこと」のフグ料理をめぐる安吾の文章と、語彙、レトリック、そしてなにより発想そのものの近接が認められる。「名も殘らず、姓も知られずに終わつて居る頼朝が何人あるか知れないのである」と露伴は書く。名も姓も残らずに終わる、複数の「頼朝」が想起されている。この露伴のレトリックにおいては、「頼朝」という名詞が、「あの頼朝」（源頼朝）ではなく、「頼朝のように有り得たかもしれない無数の人間」を集合的に想起させるために用いられる。これは、安吾が、「ラムネー氏」（ラムネの発明をした一人のだれかの仮称）から「ラムネ氏」（集合的存在）を語るレトリックをつむぐことと、よく似ている。また、安吾の文章における「太郎兵衛」や「頓兵衛」という無名の人間をあらわす仮名は、露伴「崖傍の甚次郎兵衛や新田の平五左衛門やに打き伏せられて痛い目に逢つたに相違ないのである」との近接も見られる。

安吾の露伴に対する言及は多くないものの、「五月の詩」（一九四二）の中などには、露伴への言及があり、そこではあるエピソードを読んだ典拠を忘れ、森鷗外「都甲太兵衛」かと思ったが違う、ならば「案外、露伴とか」と安吾は述べている。こうしたふいの言及があるところを見ると、ある程度、安吾は露伴を読んでいたのではないかとも思われ、「ラムネ氏のこと」に見られるこうしたレトリックは、露伴『史傳小説集　一』以前に出たいずれかの版で、安吾が露伴「頼朝」を読んでおり、その読書体験が反映されたものであったかもしれない(25)。

五、裏返された鷗外「サフラン」としての「ラムネ氏のこと　中」

本項では、「ラムネ氏のこと　中」を、森鷗外「サフラン」を補助線として、対比的に分析したい。「ラムネ氏のこと　中」は、安吾が若園清太郎と過ごした奈良原鉱泉で過ごした折の出来事に、材が取られている。これは、一九三五年のことなので、「上」に語られた出来事から、時間は約五年、遡行する。一九三五年七月から九月にかけて安吾が奈良原鉱泉で過ごした際の出来事であり、若園清太郎『わが坂口安吾』にも、この滞在のことは記されている。先行研究で指摘されているように、若園の『わが坂口安吾』などを参照すると、「ラムネ氏のこと　中」は、多分に作家的誇張が含まれる内容であり、たとえば食事が満足いくものでなかったのは、宿泊費の問題だったようだ(26)。

「ラムネ氏のこと　中」で「尋常一様の味ではない」と誇張して述べるこの旅館の食事には「食物に就て不満を言わぬたち」の安吾も「悲鳴」を挙げてしまったらしい。そう書いた次に、文章の上に「茸」が現れる。「茸」に関しては、味の旨い・不味いが問題なのではなく、「素性ある」ものかどうか、すなわち、毒茸なのかそうでないのかという味以前のことが問題になる。「素性ある茸」とは、別の言い方をすれば、その茸の名前と形態双方を見知っている茸、あるいは、はじめて出会う茸であったとしても形態から植物事典でその名前に至ることができる茸、ということである。ただし、「植物辞典（ママ）があるならば」とは仮定なので、実際にはそれはない。よって、茸の名前に至ることはできない。名前を知ることは分節化であり（「茸」の中の「松茸」のように）、名を把握することによって目の前の茸を分節化できないことは、毒によって死ぬかもしれないという不安に直結する。そのさまが滑稽味を伴って語られる。「この部落には茸とりの名人がゐて、この名人がとつてきた茸であるから、絶対に大丈夫なのだと宿屋の者は言ふ」し、老人本人もまた、「俺の茸は大丈夫だと自ら太鼓判を押してゐ」

たようだ。だが、安吾は、「植物辞典」を見ないうちは、安心できないと思い、この茸を食べることができない。ところが、この老人が、安吾たちの滞在中に、「自分の茸にあたつて、往生を遂げてしまつた」ことが述べられる（先行研究に指摘がある通り、若園の回想には、このような「茸とりの名人」がいたことも、彼が自分でとった茸にあたって死んでしまったことも書き残されていないので、安吾の作家的虚構だとも考えられる）。そして老人は、「必ずしも後悔して」おらず、「かういふことも有るかも知れぬといふことを思ひ当つた様子」でもあり、「素直な往生」を遂げたのだと言う。「さうして、この部落では、その翌日にもう人々が茸を食べてゐたのであつた」と書き、次の段落で安吾は「つまり、この村には、ラムネ氏がゐなかつた」と飛躍する。

安吾によって描かれる、この村の中での茸には、実は確かな分節化がある。それは名前（たとえば「松茸」）によるものではなく、名人がとってきた茸かそうでない茸か、という分節化である。それは「絶対大丈夫」な茸として、ほかの茸から弁別される。名人自らも、自分がとってきた茸を「俺の茸」と呼び、他から区別する。だが外からやってきた安吾にとっては、その分節化そのものが疑わしいと思われるので、「植物辞典」で確かめない限り、口にすることができない。こうした疑いが現実になったかのように、老人は、自分の茸にあたって死んだことが書かれる。

ここで老人が死ぬ際に村の人間に伝えるべきだったことは、フグにあたって死ぬ「頓兵衛」が子孫に伝えた（と安吾が思い描いた）ように、どのような茸にあたって自分は死ぬのかということだ。しかし、それが伝えられた様子はない。そしてもう、次の日には、村人たちは何事もなかったように茸を食べていた。そうした村人の姿を安吾は「この村には、ラムネ氏がゐなかつた」と書き、けして称揚しない。その一方で、ラムネ氏はひとりとは限らず、「血と血のつながりの中」に「ようやく一人のラムネ氏」がひそみ、「常にひそんでいる」のかもしれないとも書く。また、「この村には、ラムネ氏がゐなかつた」と言う一方で、「恐れて食わぬ」自分の中にも「ラムネ氏」は「ひそんで」いないとも述べている。

当時、新潮社の編集者だった和田芳恵は、「ラムネ氏のこと」が発表された時期の「都新聞」は、秋聲「縮図」が「情報局の干渉」によって連載中止となったことで、検閲に敏感になっていたことを書きのこしており、それは安吾「ラムネ氏のこと」が掲載される約二か月前の出来事である[27]。このような状況を確認すると、安吾「ラムネ氏のこと」にも当然、検閲への意識はあったろうと推測される。「ラムネ氏のこと　中」の茸をめぐるこうした安吾の文章は、一九四一年四月にはすでに米が配給制になっており、食べられるものはなんでも積極的に利用しようという代用食の研究などが徐々にされはじめていたことを考え併せると、こうした文脈と読みようによっては合うものでもあり（未知の食材を怖れて食わぬ人間の中に「ラムネ氏」はいない）、両義的に読めるように書く意識が、安吾にあったのかもしれない。

このような「ラムネ氏のこと　中」は、先行する鷗外「サフラン」（一九一四）を反転させた文章として読むことができるように思われる。鷗外「サフラン」は、「物」と「名」を主題とする随筆であり、一九二四年、尾竹一枝の雑誌『番紅花（サフラン）』（『青鞜』の後継であり『女人芸術』の前身という側面を持つが短命に終わった）の創刊号・巻頭に、『番紅花』創刊の支援として書かれ、掲載された。

鷗外は、名を知ることがその実体を知ることに先行する、という事象について語っている。そして、読書を通して、多くの「物の名」が「器に塵のつくように」記憶に残っていった幼少期のことが述べられる。「植物の名」もまたそうだった、と鷗外は書く[28]。父・森静男にオランダ語の手ほどきを受けるなかで、「字書」を与えられる。それを見るうちに、「サフラン」という言葉に幼い鷗外は出会う。それは「サフラン」とカタカナで表記されていたのではなく、「泊夫藍」と漢字によって表記されていた名詞だった[29]。また、「今でも其字を記憶してゐる」とあるように、誰かに聞いて耳で覚えた言葉としてではなく、あくまで「字書」の中にある書かれた言葉としてこの名詞と出会ったことが述べられる。

「サフラン」という言葉の発話はその後に行われる。父は、蘭医らしく、この植物の利用法によって、「サフラン」を説明してくれる。それは「物に色を附ける草」であり、父はそれを「薬箪笥の抽斗」からとりだして見せてくれる。それは黒ずんだ干物であり、生きている「サフラン」と出会うわけではない。そしてまた、父ももしかしたら生きたサフランを見たことはなかったかもしれないとも書かれる（当時は珍しい植物だったのだろう）。そして時間は、子供時代から「二三年前」に飛び、人力車の上からサフランが売られているのを眺め、「圖譜で生の花の形だけは知つてゐたので」「おや、サフランだな」と思う瞬間が書か

れる。その植物をなんと呼び、どのような漢字をあて、なんに使うのか、どんな形の花をしているかまで知っていても、その生の花を見るのははじめてだった。このように、名詞との遭遇が先行し、サフランという植物そのものとの出会いが後発するという出会いの形が語られる(30)。

手にいれた鉢植えのサフランは、わずか二、三日で萎れてしまった。そして注意を払わなくなったが、ふたたび葉が広がってきたのを目にする。「物の生ずる力」の「驚くべき」さまをここに鷗外は書き止める。それは一度萎れてしまったサフランと再び出会うことでもある(31)。そして最後には、それまで「物」として語られていたサフランが、「生存」しているものとして言及されて終わる。鷗外「サフラン」は、紅野謙介が言うように、「「物」「名」「形」「力」の関係がみごとにこのエッセイの中に収められている」文章である(32)。

繰り返すが、鷗外「サフラン」は尾竹一枝の雑誌『番紅花』の巻頭に掲げられた。「サフラン」はあるひとつの植物の集合を指す普通名詞だが、それがいま新雑誌の名前として名づけられ、生まれようとしている瞬間のために書かれた文章でもある。「サフラン」という普通名詞に新しく意味がひとつ加わる瞬間に鷗外が立ち会おうとする含みが、この文章にはある（これ以前に、「シラカバ」や「ザンボア」という名詞が単に植物の名前のみを示すのではなくなったのと同様に）。事実、『番紅花』がなぜサフランという雑誌名に決まったのかは、明かされていないが、雑誌の名前が決定してから、尾竹一枝は、鷗外に原稿依頼に行っている(33)。

安吾「ラムネ氏のこと　中」で述べられるエピソードは、出された茸の「素性」がわからず、「植物辞典」をひくこともできない、すなわちその茸の名前に到達することができないという不安によって、食べることをためらうものだった。鷗外「サフラン」安吾「ラムネ氏のこと」いずれも「名前」と「もの」の関係を定義する随筆の系譜にあると解釈するとき、「サフラン」は名詞とその由来や機能が先行して認知され、ものそのものは後発的に認知される、という視点から展開され、「ラムネ氏のこと　中」はそれとはちょうど反対に、ものそのものは現前しているが、名詞や安全性がいつまでも不可知なので、ものそのものに手が出せないという状況が描かれており、見事に反転しあう二つの文章と言える。

六、「ラムネ氏のこと　下」、辞書と参照の困難

先行研究の多くで指摘されているように、「ラムネ氏のこと」において、「ラムネ氏」のようにテーマとして仮構された名詞ではないもので、「上」「中」「下」いずれにも共通して登場するものは辞書や事典類である。「上」においては「プチ・ラルッス」、「中」においては「植物辞典」、「下」においては「伴天連達」の「作つた」「辞書」が登場する。安吾は、辞書を探すけれども探す言葉が見つからない、というモチーフを何度か繰り返して作品に登場させている。そのモチーフが明確に生かされたのが、「ラムネ氏のこと」だったように思われる。

「上」ではまず、三好達治が「うちの辞書」をひくが「ラムネー氏」という名詞を見つけることができず、帰宅した安吾がプチ・ラルッスをひくと「フェリシテ・ド・ラムネー」という人名は見出せたが、「ラムネ」の発明者であるという記述はなかった、と二つの参照の困難が描かれた。そして「中」では、「植物辞典」そのものがそこにはなく、目の前の茸を辞典のなかに探すことができない、ということが書かれていた。「下」は、より困難な参照をめぐって展開される。

宣教師たちが来日した際、今日的な意味においての「愛」をどう翻訳すべきかをめぐって「彼等はほとほと困却した」と安吾は書く。ただし、「下」の全体は、論理的には破綻しているようにも思える。「愛」という言葉に不義を連想させる意味しかない時代ならば、そもそも「アモール（ラヴ）」の訳語として「愛」という言葉は最初から選ばれもしないはずであり、「切支丹」たちが「アモール（ラヴ）」を訳そうとして苦闘したのだとすれば、それは三百何十年前の「愛」や「恋」という言葉が持つ意味に対して苦闘したのではないはずだ。「愛」や「恋」という言葉の明治以降の使われ方と、三百何十年前当時の「愛」や「恋」との使われ方とが混同されたまま安吾の文章は進んでいく印象を受ける（先行研究では、この部分は新村出『日本の言葉』が典拠とされる）。

「ラムネ氏のこと　下」において、来朝した伴天連たちがつくろうとしたのは辞書である。今日の意味においての「愛」の訳語として彼等が考え出した言葉が「御大切」であった。

「ラムネ氏のこと　上」「ラムネ氏のこと　中」において辞書をめぐって安吾が述べるのは、辞書を参照しても求める名詞がないこと、出て来ても求める記述ではないこと、そもそも辞典が手許になく参照できないこと、という参照の困難だったが、「下」の伴天連たちの困難は、参照すべき辞書そのものがない、

というものであった。それゆえに、「ラムネ氏のこと　下」においては、辞書は参照されるべきものではなく、辞書そのもの、訳語そのものが創造されるべきものとして登場し、「御大切」という言葉を編み出した伴天連の姿が述べられている。新たな名詞を創造することが、名詞そのものの創出であると同時に、新しい概念そのものの提示であるような言葉のありように安吾は言及する。

そして、この短いエッセイの最後で、「フグに徹しラムネに徹する者のみ」が「とにかく、物のありかた」を変えてきたのだ、と安吾は言い、そして戯作者もまたひとりの「ラムネ氏」であると書く。「中」の終わりにおいて安吾は、たしかに「私のやうに恐れて食はぬ者の中には、決してラムネ氏がひそんでゐない」と述べていたが、戯作の領域においては自分もまた「ラムネ氏」になろうとしていることを示唆して、この随筆を終えている。「物のありかた」を変えていくような人間は、これまでにも歴史のなかにたくさん存在した。それは、ラムネ壜の発明やフグ料理の成立といった、一見「たあいもなく滑稽な」事業を行って死んでいった人たちであり、その人たちの名は残っていない。それは「上」に登場する、フグ料理を可能にして死んだ多くの「頓兵衛」や「太郎兵衛」のように、仮名によってしか名指すことのできない無名のひととして、安吾はその存在を思い描く。

そしてこのことは、「ラムネ氏のこと」全体を通して、辞書が参照されようとするとき、必ずなんらかの齟齬が起こるように書かれることと無縁には思われない。辞書に書いていないことやひとは、存在しないのではなく、ただそこに載っていないのに過ぎない。安吾の文学において、こうした参照の困難は、明確に、肯定的な意味を持っている。「ラムネ氏のこと」全体を通して語られていた、辞書によって言葉を探すがその参照が困難であるというモチーフは、たとえば安吾の小説「勉強記」やエッセイ「大井広介（ママ）といふ男」などにも確認できる。「勉強記」では、探す単語がまったく現れてくれないにもかかわらず、それは「スポーツ」のように「快く疲労」させてくれ、「もっと実質的な勉強」をした気持ちにさせ、「肉体がそもそも辞書」になってしまうという感覚が述べられ(34)、「大井広介といふ男」では、安吾が辞書を引いても見いだせない名前を、すべて覚えている大井廣介という友だちの愉快さを、安吾は実に楽しそうに書きのこしている(35)。こうした「辞書が参照できない」という安吾のモチーフがうまく用いられた文章が、「ラムネ氏のこと」と言える。

終わりに

本論では、坂口安吾「ラムネ氏のこと」をめぐって、その歴史的な位置づけを露伴、鷗外といった先行作家の文章から対比的に考察した。安吾「ラムネ氏のこと」は、まず露伴の「文明の庫」と基本的な着眼において、共通点が多い。それは、身のまわりの、とるに足らないように見える事物の起源に注意を強く喚起する点に認められ、さらに言えば、発明者ひとりのみならず、それを成し得るまでの多くの人間の線的な営為にも読者の注意を向けようとしている点に認められる。他方、差異は、露伴においては、そうしたものを創り出した人間の固有名を記述することに対する強いこだわりが認められる一方、安吾はむしろそれを不可知なままに留めようとするという点である。また、露伴の史伝「頼朝」との関連をめぐっては、修辞や発想の近接が確認できた。加えて、鷗外「サフラン」との対比から読むとき、「ラムネ氏のこと　中」は、事物と名詞の関係という意味において、対照をなす文章になっていると言える。

歴史の中で、仮名によってしか名指すことのできない無名のひとを相対的に名指すために安吾が用いる名前が、ラムネ壜の発明者からいつのまにかこの随筆のなかでその包括する範囲を大きく拡げた「ラムネ氏」という集合的な仮名であった。この「ラムネ氏」という集合的な名詞を仮構し、そうした人々を名指すことこそ、「ラムネ氏のこと」の目的であっただろう。そしてそれは、小説・エッセイ・評論を含めた文章全般において、「辞書」をひいてもある言葉を見出すことができなかった、という参照不可能性へ安吾が何度か肯定的に言及していたこととも無縁ではないだろう。

註

(1) 「ラムネ氏のこと」の文章は、『坂口安吾全集』三、筑摩書房、一九九九、に依拠する。

(2) 大井廣介「解説」『現代日本文学館　二七　梶井基次郎・中島敦・坂口安吾』文藝春秋、一九六六、四六七

(3) 浅子逸男「ラムネ氏のゆくえ　――死せざればただの怪物――」『稿本近代文学』十七、筑波大学、一九九二、一九七

(4) 丸川浩「坂口安吾の文明批評家的視点　――その成熟の過程と柳田民俗学――」山根巴・横山邦治編『近代文学の形成と展開』、和泉書院、

一九九八、二二三

(5) 坂口安吾「釣り師の心境」『坂口安吾全集』八、筑摩書房、一九九八、二二一

(6) 萩原朔太郎「ラムネ」『萩原朔太郎全集』八、筑摩書房、一九七六、三〇六、初出・『令女界』第七巻八号、一九二五・八

(7) 「ラムネの栓天をついて時鳥」（子規、一八九一）「売れ残るラムネに秋の夕日哉」（寺田寅彦、一八九八）などの句が「ラムネ」を「夏の季語」として使ってはいないのに対して、「巡査つときてラムネ壜さかしまに」（虚子、一九三一）のように、朔太郎が「ラムネ」を書いた時期に近いころの俳句には、これを夏の季語として使用する例がすでに確認できる。

(8) 幸田露伴「文明の庫」『露伴全集』一一、岩波書店、一九七八、二三五―三五六

(9) 平川祐弘『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク　中村正直と『西国立志編』』名古屋大学出版会、二〇〇六、一二一―一三八

(10) 中村正直の同人社に、安吾の父・坂口仁一郎は、一八七五年、十六歳のころ、数か月学んでいる。『坂口安吾全集』別巻、筑摩書房、二〇一四、六三七

(11) 前掲露伴全集一一、二三八

(12) 前掲露伴全集一一、二三八―二三九

(13) 前掲露伴全集一一、二四〇―二四二

(14) 前掲露伴全集一一、二四三

(15) 前掲露伴全集一一、二四四

(16) 前掲露伴全集一一、二四〇

(17) 前掲露伴全集一一、二四九―二五〇

(18) 小野二郎「物質に孕まれた夢　芸術・教育・労働」『小野二郎著作集』三、一九八六、三七二―三七四

(19) 坂口安吾「高千穂に冬雨ふれり」「安吾新日本風土記」『坂口安吾全集』一五、筑摩書房、一九九九、一八八。なお、安吾の「コンニャク」への言及は、「明日は天気になれ」（一九五三）にも見られる。

(20) 前掲露伴全集一一、二四七

(21) 蔵書番号・三七六番を付された幸田露伴『史傳小説集　一』であり（同、二五）、目録作成者による注によれば、「印が書いてあるページが複数ある」とされる（同、七二）。ただ、安吾旧蔵の当該本を、筆者は実見していない。

(22) 上田貴美「坂口安吾「源頼朝」における幸田露伴「頼朝」の受容――付「青春論」と森鷗外・吉田精顕――」『歴史文化社会論講座紀要』十四号、京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座、二〇一七、六三―八八

(23) 三好達治「露伴さん雑記」、『三好達治全集』六、筑摩書房、一九七六、七四

(24) 幸田露伴「頼朝」『露伴全集』一六、岩波、一九七八、四〇―四二

(25) 前掲安吾全集三、四五七

(26) 若園清太郎『わが坂口安吾』昭和出版、一九七六、七六

(27) 和田芳恵『ひとつの文壇史』講談社文芸文庫、二〇〇八、一九七

(28) 森鷗外「サフラン」『鷗外全集』二六、岩波書店、一九七三、四五九

(29) 前掲鷗外全集二六、四五九

(30) 前掲鷗外全集二六、四六〇

(31) 前掲鷗外全集二六、四六一

(32) 紅野謙介「森鷗外『サフラン』における「物」と「名」」『研究紀要』五六、日本大学文理学部人文科学研究所、一九九八、二一

(33) 尾竹一枝「編集室にて」『番紅花　合本版』一、不二出版、一九八四、二二二―二二八

(34) 坂口安吾「勉強記」前掲安吾全集三、筑摩書房、六八

(35) 坂口安吾「大井広介といふ男」前掲安吾全集三巻、四〇五

本論は、二〇一七年五月、日本近代文学会全国大会において行った発表に基づく。

Nouns in Sakaguchi Ango's 'Ramuneshi-no-koto' ('About Mr. Ramune'):

A Comparison with Kōda Rohan's 'Bunmei-no-kura'('Storehouse of Civilization') , 'Yoritomo', and Mori Ōgai's 'Saffron'

YOSHIDA Daisuke

The essay 'Ramuneshi-no-koto' ('About Mr. Ramune') by Sakaguchi Ango(1906–1955) was published in the Miyako Shinbun in 1941. Although short, it conveys the appeal of Sakaguchi Ango's writing well, and a relatively large number of previous studies have been dedicated to it.

This study is an examination of the attitude towards nouns present in the essay. Rather than examining Sakaguchi Ango as an author or establishing an interpretation that takes into account contemporary circumstances, the emphasis of this paper is placed on examining the essay's characteristics in comparison with the works of previous authors writing on similar themes.

In comparison with which writings should the characteristics of 'Ramuneshi-no-koto' be gauged? In this study, I would like to highlight 'Bunmei-no-kura' (1898) by Kōda Rohan (1867–1947) as a precedent to 'Ramuneshi-no-koto' and as a text whose content bears a close resemblance to Sakaguchi Ango's essay. The fact that these texts are similar in terms of content also means that their differences can be revealed by reading them in conjunction. While it is difficult to prove any direct influence, considering 'Bunmei-no-kura' as a reference should help further elucidate the historical context of 'Ramuneshi-no-koto', which was published later. For the same reason, I will also venture a comparison with the novel 'Yoritomo'(1908) by Koda Rohan, the essay 'Saffron' (1914) by Mori Ōgai (1862–1922).

On the basis of the points mentioned above, I hope to reframe the discussion on 'Ramuneshi-no-koto' as one about nouns that are unique to Sakaguchi Ango.